（岩倉紙芝居館古典館<http://hjueda.on.coocan.jp/koten/koten.htm>）　宰主　上田啓之

『荀子』議兵篇に、臨武君の言として「孫（子）・呉（子）も之（勢利、変詐、感忽、悠闇）を用いて、天下に敵無し」とあり、『韓非子』五蠧篇には、「孫・呉の書を蔵する者は、家ごとに之れ有り」、さりとて兵は弱いと嘆いており、戦国時代に広く普及していたとされる。司馬遷は「孫子・呉起列伝」を著し、呉王の闔閭（こうりょ、在位BC514-496）に仕えた斉人の孫武、その百年後の子孫、斉の田忌に仕えた孫臏の事績（桂陵の戦BC353、馬陵の戦BC341）、孔子の高弟の曾子の弟子であり、後に魏の文候（在位BC445-396）、武候（在位BC395-370）に仕えた衛人の呉岐の事績を記した。『漢書』芸文志・兵権謀家類には、『呉孫子兵法』82巻・図9巻、『漢書』30巻・志第10に「斉の孫子89編、図4巻」とあり、 顔師古がこれに「孫殯」と注 している。現テキストは13編であり、魏の曹操（武王）が編纂注した『魏武注孫子』による。
1972年、山東省銀雀山の前漢時代の墳墓から『竹簡孫子』や『孫殯兵法』の竹簡が出土し、『呉孫子兵法82巻・図9巻』と『斉の孫子（孫殯）89編、図4巻』は別物で、孫殯の兵法書は伝わっておらず、『呉孫子兵法』が継承されていることが判明したそうである。孫武の記したものが、後継者により82巻・図9巻に膨れあがり、曹操が基本となる部分に簡略化したとされる。続日本記、天平宝字四年（760年）十一月丙申条に、「舍人の春日部三関に刀を授け、中衛舍人土師宿禰関成等六人を大宰府に遣はし、大弐吉備朝臣真備に就かせ、諸葛亮八陳と孫子九地及び結営向背を習はしむ」とあり、「孫子」はこの時代から我が国でも読まれていた。

、、、、、、、、、、、、、、　孫子曰く、およそ先（さき）に戦地に処（お）りて敵を待つ者は佚（いっ）し、後（おく）れて戦地に処（お）りて戦いに趨（おも）むく者は労す。ゆえに善く戦う者は、人を致（いた）して人に致（いた）されず。よく敵人（てきじん）をしてみずから至（いた）らしむるは、これを利すればなり。よく敵人（てきじん）をして至るを得ざらしむるは、これを害（がい）すればなり。ゆえに敵佚（いっ）すればよくこれを労し、飽（あ）けばよくこれを饑（う）えしめ、安（やす）ければよくこれを動（うご）かす。
■佚が勞の反対語として用いられている。佚\*1は失と人からなり、失\*2は佚の初文で、巫女が髪を振り乱して祈り舞う姿、神懸かりのエクスタシーの状況で、狂おしくもあでやかなこと、佚として、みだら、たのしむの義となった（字統）。ここでは安楽の義。勞は\*3、（かがり火）と力（耒；すき）からなり、農耕の始めと終りに火で焼き、虫害を祓うことを原義とする。また、\*4、二火と心とするものがあり、心を焼かれるように患わすこと。■趨qūは説文に「走なり」注に趣qūの仮借とある。また、趨cù趣cùは促cùに通ずとある。促されて戦いに趣く側は労す。■戦いは仕掛けた方が優勢、仕掛けられた方が劣勢となる。敵をおびき寄せるには利で釣る。敵を寄せ付けないためには害を施す。■敵が安楽であれば、陽動をして疲労させる。敵に十分食糧があれば、浪費、消失、糧道を絶つ方策を図る。敵が安泰であれば、風評を流し離反や寝返りを策す。
\*1\*2\*3\*4

、、、、、、、、、、、、、、、、、
その必ず趨（おもむ）く所に出（い）で、その意（おも）わざる所に趨（おもむ）き、千里を行（ゆ）いて労（つか）れざるは、無人の地を行（ゆ）けばなり。攻めて必ず取るは、その守らざる所を攻（せ）むればなり。守りて必ず固（かた）きは、その攻めざる所を守ればなり。ゆえに善（よ）く攻むる者には、敵、その守る所を知らず。善（よ）く守る者には、敵、その攻（せ）むる所を知らず。微（び）なるかな微（び）なるかな、無形（むけい）に至る。神（しん）なるかな神（しん）なるかな、無声（むせい）に至る。ゆえによく敵の司命（しめい）をなす。
■所不趨は古い諸家の注や竹簡本からして、所趨、其必所趨、敵が必ず其処へ趨かざるを得なくして、誘（おび）き出し叩くと解されている。■敵が居ない所を行軍すれば疲れない。敵が守らない所を攻める。固く守り敵に攻めさせない。これは力学。敵が何処を守ってよいか分からなくさせる。敵が何処をせめてよいか分からなくさせる。これは心理学。■形とは陣形、声とは旌旗金鼓、合図、信号、命令の伝達。微は相手からぼんやりかすんで見えない、相手から見えないが故に無形、攻めることに不安になる。神は以心伝心、旌旗金鼓以前に意図が伝わり、無声にして不意に敵前に現れ、敵は防御ができない。微にして神に対応せば、敵の運命を司ることができる。力学的にも心理学的にも高きから低きを伐つがごとし。

、、、、、、、、、、、、　進みて禦（ふせ）ぐべからざるは、その虚を衝（つ）けばなり。退（しり）ぞきて追うべからざるは、速（すみ）やかにして及ぶべからざればなり。ゆえにわれ戦わんと欲すれば、敵、塁（るい）を高くし溝（こう）を深くすといえども、われと戦わざるを得（え）ざるは、その必ず救う所を攻（せ）むればなり。われ戦いを欲せざれば、地を画（かく）してこれを守るも、敵、われと戦うを得（え）ざるは、その之（ゆく）所に乖（そむ）けばなり。
■禦は説文に「祀（まつ）るなり」とあり、古くは、祟りを祓うための祭祀であり、御がその初文、御が多義に用いられ、初義を示すために禦が用いられた（字統）。御に「まもる」「ふせぐ」の意味があるが、物理的な防御のみならず心理的な防御が含まれている。虚を衝くとは、物理的な空白状態のみならず、心理的空白、不意を衝くことも含まれる。■攻めることが不利と判断すれば、退却をする。素早く退却し、もし敵が追撃しても、疲労する敵を迎撃するくらいに。敵を堅固な場所から誘いだす手段の一つでもある。■高塁深溝の敵を誘いだすには、本国や同盟者を攻撃し、救援せざるを得ない状況をつくる。■乖\*1は説文に、「戻（もと）るなり」とある。背の肉の左右相背く形の引伸（字統）」とある。画地とは地面に地割の線を引くこと。高塁深溝を建設するものではない。李筌は、「『天一遁甲』の真人閉六戊之法を用い、刀を以て地に畫して營を為（す）」、孟氏は、「物を以て地に畫して守るとは、其の易きに喻う。蓋し、我能く敵人の心に戾（もと）れば、敢えて至らず」としている。敵が意図を見透かされており、攻めれば術中にはまると躊躇させることが有効であるとする。心理的なもの。
\*1ladle
、、、、、、、、　ゆえに人を形（かたち）せしめてわれに形（かたち）なければ、すなわちわれは専（あつ）まりて敵は分かる。われは専（あつ）まりて一となり、敵は分かれて十とならば、これ十をもってその一を攻（せ）むるなり。すなわちわれは衆（おお）くして敵は寡（すく）なし。よく衆（しゅう）をもって寡（か）を撃たば、すなわちわれのともに戦うところの者は約（やく）なり。
 ﾘ
■敵の衆を寡にするには敵軍を分散させる。己の形を視せず（何処を守り、何処を攻めるか敵から不明にし）、敵の攻守を分散させる。■專\*1は叀と寸からなり、叀は橐（ふくろ）の上部を括（くく）った形、寸は手、專は橐の中に入れたものを手で固める意（字統）。專は一箇所に固めること、分\*2は八と刀からなり肉を切り分けること、別\*3は冎（骨）と刂（刀）からなり、骨から肉を切り別けることが原義。■約\*4は糸と勺からなり、勺はものをかがませている形（字統）。糸で結んでまとめる、縛り付けること。相手は分、我軍と友軍はまとまり一体、約となる。
\*1\*2\*3\*4

、、、、、、、、、、、、、　われのともに戦うところの地は（敵）知るべからず。（敵）知るべからざれば、すなわち敵の備（そな）うるところの者多し。敵の備（そな）うるところの者多ければ、すなわちわれのともに戦うところの者は寡（すく）なし。ゆえに前（まえ）に備うればすなわち後（うしろ）寡（すく）なく、後に備うればすなわち前寡（すく）なく、左に備うればすなわち右寡（すく）なく、右に備うればすなわち左寡（すく）なく、備えざるところなければすなわち寡（すく）なからざるところなし。寡（すく）なきは人に備うるものなり。衆（おお）きは人をしておのれに備えしむるものなり。
■会戦の場所と日時を敵に知らしめず、敵に攻守の地、軍の集結の時期を不明にし、集結を妨げる。中国春秋時代においては、ほとんどの諸侯は、元来周王の親族であり、諸侯は婚姻関係にあり、子供の王位継承に関して、臣下を含めて複雑な人間関係が形成されていた。したがって、相手の行動が筒抜けとなりやすく、秘密を維持する事は容易ではなかった。ここでは、越との戦が想定されており、呉越は親戚関係にはなかった。

、、、、、、、、、、、、、、、、、、ゆえに戦いの地を知り、戦いの日を知れば、すなわち千里（せんり）にして会戦（かいせん）すべし。戦いの地を知らず、戦いの日を知らざれば、すなわち左は右を救（すく）うことあたわず、右は左を救（すく）うことあたわず、前は後を救（すく）うことあたわず、後は前を救（すく）うことあたわず。しかるをいわんや遠きは数十里（すうじゅうり）、近きは数里なるをや。われをもってこれを度（はか）るに、越人（えつひと）の兵は多しといえども、またなんぞ勝敗（しょうはい）に益（えき）せんや。ゆえに曰く、勝（しょう）はなすべきなり。敵は衆（おお）しといえども、闘（たたか）うことなからしむべし。
■益（益）には二系統があり、一つは水と皿から成り、水が皿からあふれる形で「溢」とされ、増加すること。他一つは、二股の分かれた糸の端をくくる形で「縊」とされ、しめる、くくること。前者では、衆が分散すれば益ではなくなる。後者では衆が勝敗を締めくくる（死生を決する）ものではない。■勝可爲也　勝つことは可能であり、敵を戦わせなくすることも可能である。

、、、、　ゆえにこれを策（はか）りて得失（とくしつ）の計を知り、これを作（おこ）して動静（どうせい）の理（り）を知り、これを形（あらわ）して死生（しせい）の地を知り、これに角（ふれ）て有余（ゆうよ）不足のところを知る。
■策は説文に「馬の箠（むち）なり。策を以て馬を擊つを敇（さく、むちうつ）と曰う。經傳多く假に策を冊と爲す。又計謀を籌策と曰うは、策は猶籌（ちゅう、数を[数え](https://www.weblio.jp/content/%E6%95%B0%E3%81%88)るのに用いた木の串）、籌は猶筭（さん、計算用具）、筭は曆數を計る所以、謀りてこれを得る」とある。彼我の得と失を一つ一つ数え上げて比較し、総合判断をする。■作は多義、始・起・興・生・動・用・使・治・為に用いられる。■理は説文に「玉を治むなり。戰國策に、鄭人謂玉の未だ理せざるを璞と爲し、是、理は剖析すなり。玉は至堅と雖も、而るに之を治めて其の鳃理を得、以て器と成すこと難からず。之を理と謂う」とある。鳃理とは玉を磨いてあらわれる文（あや）、であり肌では肌理（きめ）、すじの美から条理、条理ありて治る。あや、きめ、すじ、ことわり、おさむの義となる。敵に仕掛けてその動静のすじを見分ける。■形は敵に陣形を為さしめる。死地にあるか生地にあるかを判断する。地者遠近險易廣狹死生也からすれば死は低地など行き場の無い地、生は高地など有利な地。■牛角、角度、触角などの角は、jiǎo。酒器の角、角力の角はjué、較べ、競う義。角を触chùとみて“ふれる”とよまれているが、juéで角之は、之と角（くらべ/あらそい）て、とすべき。角すべき対象の有余・不足は兵員・兵器のみならず、兵站能力や糧食、援軍等を含む。

、、、、、、、、、、　　ゆえに兵を形（あらわ）すの極（きょく）は、無形（むけい）に至る。無形（むけい）なれば、すなわち深間（しんかん）も窺（うかが）うことあたわず、智者も謀（はか）ることあたわず。形（けい）に因（よ）りて勝（しょう）を錯（おく）も（於衆の二字を省く）、衆は知ることあたわず。人みなわが勝つゆえんの形（けい）を知るも、わが勝（しょう）を制するゆえんの形（けい）を知ることなし。ゆえにその戦い勝つや復くりかえさずして、形（けい）に無窮（むきゅう）に応（おう）ず。
■深間　敵陣に深く入り込んだ間者　■錯　説文の注に、措に通じ、措は置に通ずとあり、「おく」と訓じられている。元来は、地金に象嵌をしておいて、磨き出す方法をいい、措に通じ錯意（そい；心にかける）、錯択（そたく；えらびとる）とされる（字統）。錯勝とは勝ちを選び取ること。■形兵とは布陣であり、千、万という数の兵、歩兵（槍・盾・弓・他）、騎兵、工兵、船、兵站があり、そこに秩序がなくば機能しない。秩序があれば当然形ができる。この時代、飛行機やミサイルや潜水艦はなく、天の上に兵を揚げることも、地の底に兵を隠すこともない、比喩であり現実ではない。無形も比喩であり、間者が深く侵入しても、智将であっても、その形の意図が窺謀されない、臨機応変に形を変えると解す他あるまい。翻って、敵の形は分かるという。そんなことが可能なのか？如何にして、戦う前に、勝てる状況にするのか？

、、、、、、、、、、、、、、、　それ兵の形（かたち）は水に象（かた）どる。水の形（かたち）は高きを避さけて下（ひく）きに趨（おも）むく。兵の形（かたち）は実（じつ）を避（さ）けて虚（きょ）を撃（う）つ。水は地に因（よ）りて流れを制し、兵は敵に因りて勝（かち）を制す。ゆえに兵に常勢（じょうせい）なく、水に常形（じょうけい）なし。よく敵に因（よ）りて変化して勝（しょう）を取る者、これを神（しん）と謂う。ゆえに五行（ごぎょう）に常勝（じょうしょう）なく、四時（しじ）に常位（じょうい）なく、日に短長（たんちょう）あり、月に死生（しせい）あり。

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
| 水  | 避高而趨下 | 因地而制流 | 無常形 | 兵形を水形に比して説く。水そのものには形も勢いも無いが、集めて高きに置けば勢いがでる。 |
| 兵  | 避實而撃虚 | 因敵而制勝 | 無常勢 |

■仏を象（かた）どり人の形にしたものが仏像。形の無いものに形を与える。兵も一人一人の集合であり千、万という集合に、元来、定形があるものではない。如何なる訓練をし、如何なる形にするかで、烏合の衆ともなれば、精兵ともなる。■神　精神のはたらきやそのすぐれたものを神爽（しんそう）・神悟のようにいい、人智をこえるものを神秘という（字統）。■五行無常勝　木克土、土克水。水克火、火克金、金克木（木生火、火生土、士生金、金生水、水生木）■四時無常位　春夏秋冬を五行では、生、長、化、収、蔵あるいは風、暑、湿、燥、寒の変転により、春、夏、長夏、秋、冬とする。■日有短長　春分、夏至、秋分、冬至　■月有死生　新月、上弦、満月、下弦　■自然の変転に従えば事は成り易く、逆らえば事成り難し。

**宋刊十一家註孫子**（[HP](http://www.cos.url.tw/sunzi/10man.htm)）（注釈者のプロフィールについては、古典ぱん（[HP](https://k10p.net/?p=1253)）に詳しい）

〈虛實〉篇

曹操曰く、能く虛實を彼己にす（彼を虚とし己を実とす）。
李筌曰く、善く兵を用うは、虛を以て實と為す。善く敵を破るは、實を以て虛と為す。故に其の篇に次ぐ。
杜牧曰く、夫れ兵は、實を避け虛を擊つ。先ず須く彼我の虛實を識る。
王晳曰く、凡そ自ら守るは實を以てし、敵を攻むは虛を以てす。
張預曰く、〈形〉篇は攻守を言い、〈勢〉篇は奇正を說く。善く兵を用うは、先ず攻守兩齊の法を知り、然る後に奇正を知る。先ず奇正相變の術を知り、然る後に虛實を知る。蓋し奇正は攻守に自（より）て用い、虛實は奇正に由りて見る。故に〈勢〉に次ぐ。

（孫子曰：凡先處戰地而待敵者佚，）
曹操、李筌並びて曰く、力に餘（あまり）有り。
賈林曰く、先に形勝の地に處り以て敵を待つは、則ち備豫（予めの準備）有り、士馬は閑逸（閑靜安逸）す。
杜佑は賈林が註に同じ。
王晳は曹操が註に同じ。
張預曰く、形勢の地には、我が先にこれに據り、以て敵人の來を待てば、則ち士馬は閑逸して力に餘有り。

（後處戰地而趨戰者勞。）
李筌曰く、力不足なり。『太一遁甲』に云く、「彼來りて我を攻むは、則ち我主と為り、彼客と為る。主は易く客は難し」。是『太一遁甲』を以て言うは、其れ計の義を定む。故に勞佚事不同、先後勢異（攻め疲労する兵と休養して守る兵の差、先と後の勢の差）を知る。
杜牧曰く、後周、將帥を遣し、突厥の眾、齊に逼（せま）る。齊將の段韶これを禦（ふせ）ぐ。時に大雪の後、周人、步卒を以て前鋒と為（し）、西より下り、城を去ること二里。諸將逆にこれを擊たむと欲（おも）う。韶曰く、「步人の氣力勢には自から限有り。今、積雪既に厚く、逆に戰うは便に非らず、陳して以てこれを待つに如ず。彼は勞我は佚、これを破ること必ならむ」。既にして交戰せば、大いにこれを破り、前鋒盡く殪（たお）れ、自餘（その他）は遁（のが）る。
賈林曰く、敵が便利に處（お）れば、我は則ち往（ゆ）かず、兵を引きて別に據（よ）り、不敵を其軍に示す。敵は我を無謀と謂えば、必ず來り攻め襲う。此の如くせば、則ち反りて敵を倦（う）ましめて我は勞（つか）れず。
孟氏曰く、若し敵が已に便勢の地に處り、己方が利に赴かんとせば、士馬は勞倦（ろうけん）し、則ち利ならず。
梅堯臣曰く、先に至りて敵を待てば則ち力完す、後に至りて趨りて戰えば則ち力屈す。
何氏曰く、戰國、秦師が韓を伐ち、閼與を圍む。趙は將趙奢を遣わしこれを救わんとす。軍士の許歷曰く、「秦人は趙師が此に至るを意（おも）わず、其れ來りて氣は盛なり。將軍必ず其の陳を厚く集め以てこれを待て。然らずんば必ず敗れん」。又曰く、「先に北山に據れば勝ち、後に至れば敗れる」。趙奢即ち萬人を發しここに趨る。秦兵後に至り、山を爭いて、上（のぼ）るを得ず。趙奢は兵によりてこれを擊ち、大いに秦軍を破り、遂に閼與の圍を解く。後漢の初に、諸將、隗囂を征し、囂が為に敗れる所。光武令して悉く栒邑に軍す。未だ及び至らずして、隗囂は勝に乘じて、其の將王元、行巡をして、將に二萬餘人を隴に下り、分遣に因りて巡に栒邑を取らしめんとす。漢將の馮異即ち馬を馳せて先にここに據らむと欲（おも）う。諸將皆て曰く、「虜兵は盛んにして新たに勝に乘じており、與に爭う可からず、軍を便地に止め、方略を徐恩（おもむろにいつくし）まん」。異曰く、「虜兵は方に盛んに境に臨み、小利に狃忲（こだわり分不相応）に、遂に深入欲（せむ）。若し栒邑を得れば、三輔は動搖す。是吾が憂なり。夫れ攻むは足らず、守るは餘有り、今先に城に據れば佚を以て勞を待ち鋒を爭う所以に非ず」。遂に潛（ひそ）かに往き城を閉じ、旗鼓を偃す（伏せ片付ける）。行巡は知らず、馳せてこれに赴く。異は其の不意に乘じ、卒（にわか）に鼓を擊ち旗を建てて出ず。巡軍は驚き亂れ奔り走ぐ。追いて大いにこれを破る。東魏の將齊神武が西魏を伐つ。軍は蒲津を過ぎ、洛を涉り許原に至る。西魏の將周文帝の軍は沙苑に至る。齊神武は周文が至るを聞き、軍を引き、來りて會す。詰朝（明くる朝方）に、候騎（斥候の騎馬者）齊神武の軍且（また）至るを告ぐ。周文の步將の李弼曰く、「彼は眾我は寡、平地び陳を置く可からず。此の東十里に渭曲有り、先に據り以てこれを待つ可し」。遂に軍は渭曲に至り、東西に水を背にして陳を為し、合戰し大いにこれを破る。
張預曰く、便利の地、彼已にこれに據り、我が方彼に趨りて以て戰わば、則ち士馬勞し倦みて力足らず。或は謂所戰の地、我先に到りて、陳を立て以て彼を待つべし、則ち己は佚す。彼が先に陳を結び、我後に至れば、則ち我勞す。宋人已に列を成し、楚師未だ既に濟らずが若き類。

（故善戰者，致人而不致於人。）
李筌曰く、故に能く人の勞を致し、人の佚を致さず。
杜牧曰く、敵をして我に來就（おもむ）かしめるに致らば、我は當に力を蓄えこれを待つべし。敵人を就かしめずんば、恐るらくは我が勞す。後漢の張步の將費邑は其の弟を分けて遣わし敢て巨里を守らしむ。耿弇は兵を進め、先ず巨里を脅やかし、多くをして樹木を伐らしめ、以て坑塹（ほり）を填（う）めんと揚言（公言）す。數日にして降者有りて言く、「邑は弇が巨里を攻めんと欲（す）と聞きて、來て救はむと謀れり」。弇は乃ち軍中に嚴令し趨りて（早急に）攻具を修（繕）せしめ、諸部に、後三日、當に悉く巨里城を力攻すべしと勒す。陰に生口（投降者）を緩めて、得て亡歸（逃げ帰る）せしむ。歸者は以て弇の期を邑に告ぐ。日至れば、果して自ら將精兵三萬餘人が來りてこれを救う。弇は喜びて諸將に謂りて曰く、「吾が攻具を修すは、邑を誘致欲（せ）むのみ。今、來りなば、其れ求む所に適（ゆ）かん」、即ち三千人を分けて巨里を守り、自ら精兵を引きて岡阪に上（のぼ）り、高に乘じて大いにこれを破り、遂に陳に臨みて費邑を斬る。
杜佑曰く、言うは、兩軍相遠く、彊弱敵と俱（ひとし）ければ、彼をして歷險（越険）して來さしむ可し、我は歷險して往く可からず。必ず能く敵人を引致し、己は往（ゆ）きて從わず。
梅堯臣曰く、能く敵をして來さしめば、則ち敵は勞す。我不往就（ゆ）かずんば、則ち我は佚す。
王晳曰く、致人とは、佚を以て其の勞に乘ず。致於人とは勞を以て其の佚に乘ず。
何氏曰く、敵をして自ら來さしむ。
張預曰く、敵を致し來り戰えば、則ち彼の勢は常に虛。往かず戰に赴けば、則ち我が勢は常に實。此れ乃ち虛實彼我の術なり。耿弇先ず巨里に逼り以て費邑を誘致すは、これに近し。

（能使敵人自至者，利之也；）
曹操曰く、これを誘（いざな）うに利を以てす。
李筌曰く、利を以てこれを誘えば、敵は則ち遠くより至る。趙將の李牧が匈奴を誘うは則ち其の義なり。
杜牧曰く、李牧は大いに畜牧を縱（はな）ち、人眾野に滿つ。匈奴小しく入れば、佯北して（偽って逃げ）勝たず、て數千人をこれに委ねる。單于は大いに喜び、眾を率いて來入し、牧は大いにこれを破り、匈奴を殺すこと十萬騎、單于は奔走し、歲餘（以降）敢えて邊を犯さず。
梅堯臣曰く、何ぞ能く自ら來る？これに示すに利を以てす。
何氏曰く、利を以てこれを誘えば來る。我は佚し敵は勞す。
張預曰く、所以能く敵の來を致すは、これを誘うに利を以てすのみ。李牧が佯北し以て匈奴を致し、楊素が車を毀（こぼ）ち以て突厥を誘うは是なり。

（能使敵人不得至者，害之也。）
曹操曰く、其の必ず趨（急ぎおもむ）く所に出で、其の必ず救う所を攻める。
李筌曰く、其の急す所を害せば、彼は必ず我を釋（と）きて自ら固す（相手の急所を襲えば、相手は囲みを解き守りを固める）。魏人が趙の邯鄲を寇（おか）す。師を齊に乞う。齊將の田忌は趙を救わんと欲（す）。孫臏曰く、「夫れ紛を解く者（紛争を解決するに）控捲（拳で打つ）せず、鬬を救う者撠（ほこ）を搏（う）たず。亢（咽喉；急所）を批（ひっぱた）き虛を擣（つ）き、形格勢禁（相手を阻止し勢を封ず）せば、則ち自から解けるのみ。今二國は相持し、輕銳は外に竭（つ）き、疲老は內に殆（あやうく）す。我其の虛を襲えば、彼は必ず圍を解きて奔命す（君命で本国防衛に走り返る）。所謂一舉にして趙を存（続）して魏を（疲）弊せしむ」。後に魏は果して趙を釋（と）きて大梁に奔り、齊人に馬陵に遭（遇）し、魏師は敗績す（大敗して今までの功績を失う）。
杜牧曰く、曹公河北を攻め、師は頓丘に次（やど；宿営）る。黑山の賊于毒等は武陽を攻む。曹公乃ち兵を引きて西に山に入り、毒が本屯（本拠地）を攻む。毒はこれを聞き、武陽を棄てて還る。曹公は內に要擊（待ち伏せして攻撃）し大いにこれを破る。
陳皥曰く、子胥が楚師を疲れしめ、孫臏が魏將を走らしむの類なり。
杜佑曰く、其の所を致せば必ず走る。其の所を攻めば必ず救う。能く其の險害の要路を守れば、敵は得て自から至らず。故に王子曰く、「一猫穴に當りて、萬鼠敢えて出でず。一虎溪に當りて、萬鹿敢えて過ぎず」。守の上を言う。
梅堯臣曰く、敵が得て來ざるは、當にこれを制すに害を以てす。
王晳曰く、害を以てこれを形せば、敵はこれに患いて至らず。
張預曰く、能く敵人をして必ず得て至らざらしむ所以は、其の顧み愛す所を害すのみ。孫臏直ちに大梁に走りて邯鄲の圍を解く、是なり。

（故敵佚能勞之，）
曹操曰く、事を以てこれを煩わす。
李筌曰く、其の不意を攻め、敵をして奔命に疲れしむ（敵の君主に命令を出させて疲労させる）。
杜牧曰く、高熲が平陳の策を隋祖に言いて曰く、「江北の地は寒にして田收は差晚。江南の土は熱くして水田は早熟。彼の收穫の際を量り、士馬を微（目立たぬように）徵し、掩襲（不意を襲う）と聲言（いいふらす）せば、彼は必ず兵を屯し禦守し、得て其の農時を廢つ（陳の農事を害する）に足る。彼が既に兵を聚めば、我は便ち甲を解く」。是に陳人始めて病む。
梅堯臣曰く、これを撓（たわ）めて、得て休息せしめず。
王晳曰く、巧みにこれを致す。
何氏曰く、春秋の時、吳王の闔閭は伍員に問いて曰く、「楚を伐つは何如？」對えて曰く、「楚に執政眾くも、患を任すに適（かな）う莫し。若し三師を為して以て肄（訓練）せば：一師が至れば、彼は必ず皆て出（撃）す。彼が出でば則ち歸り、彼が歸りなば則ち出ず。彼は必ず道に弊し、亟（すみやか）に肄し以て疲れしむ。多方（面）で以て（敵を）誤らしめば、既に（敵は）罷（つか）れぬ。而る後に三軍を以てこれを繼（続）せば、必ずや大いにこれに克たむ」。闔閭はこれに從い、楚は是にて始めて病む。吳は遂に郢に入る。
張預曰く、多方を為し以てこれを誤らしむ術（わざ）は、其れ得て休息せしめず。或ひと曰く、彼若し先に戰地に處り以て我を待てば、則ち是彼が佚す。我は趨りてこれと戰う可からず。我が既に往かずば、彼は必ず自ら來る。即ち是佚を變じて勞と為す。

（飽能饑之，）
曹操曰く、糧道を絕ち以てこれを饑えしむ。
李筌曰く、其の積聚（集積）を焚（や）き、其の禾苗を芟（か）り、其の糧道を絕つ。
杜牧曰く、我が主と為り、敵が客と為れば、則ち以て糧道を絕ちてこれを饑えしむ可し。我が客と為り、敵が主と為るが如きは、則ちこれを如何？答えて曰く、敵を饑えしむ術（わざ）は、糧道を絕つに止るに非ず。但に能くこれを饑えしむとは則ち是、隋の高熲が陳を平(定)す策に曰く「江南の土は薄く、舍は多く茅竹（作りで）、畜積有り。皆て地窖（穴倉）に非ず。密かに人を遣し風に因りて火を縱て。敵が修立すを待ちて、更に復これを燒けば、數年を出ずして、自ら財力俱に盡きる可し」。遂に其の策を行えば、是に由りて陳人益（ますます）困す。三國の時、諸葛誕、文欽は壽春に據り、吳を招し援を請うに及び、司馬景王これを討たむとし、諸將に謂りて曰く、「彼當に圍を突き、一朝に決す命。或に謂く、大軍能く久しからず、食を省き口を減らし、他變有るを冀（ねが）う。賊の情を料るに、此の二者を出ず。當に多方以てこれを亂すべし」。命に因りて合圍し（まわりを取囲む）、羸疾（衰弱生病）を遣わし穀を淮北の廩（穀物倉庫）に寄せ（集め）、軍士に豆を(一)人に三升（与う）。誕、欽はこれを聞き、果して喜ぶ。景王愈（いよいよ）羸（衰弱）形以てこれを示し、誕等は益（ますます）寬（ゆる）み、恣（ほしいまま）に食す。俄にして城中の糧盡く。（景王は）攻めてこれを拔く。隋末に、宇文化及は兵を率いて李密を黎陽に攻む。密は化及が糧少きを知り、因りて偽わりてこれと和（睦）す。其の眾弊すを以て、化及は大いに喜び、恣に其れ兵は食し、密にこれを饋（おく）るを冀う。其の後食が盡き、其の將の王智略、張童仁等は所部の兵を率いて密に歸し、前後相繼き、化及は此れを以て遂に敗れる。
陳皥曰く、敵を饑（うえ）しむ術は、事に臨み機に應ずに在り。
梅堯臣曰く、其の糧を要し、得て饋らしめず。
王晳曰く、謂うは、敵人が食足りれば、我能くこれをして饑乏せしむのみ。曹公曰く、「其の糧道を絕て」。晳謂く、「積を火（もや）せ」亦是なり。
何氏曰く、吳楚の反（乱）の如きは、（漢の）周亞夫曰く「楚丘（兵か？）は剽輕（強悍輕捷）にして、與に鋒を爭うこと難し。願わくば、以て梁にこれを委ね、其の食道を絕てば、乃ち制す可し」。亞夫は兵を滎陽に會せば、吳は梁を攻め、梁は急し救を請う。亞夫は兵を引き東北の昌邑に走り、壁を深くして守り、輕騎をして高侯等に弓せしめ、吳、楚の兵後の食道を絕つ。兵は糧乏しく饑え退（ひ）かむと欲（す）。數（しばしば）戰を挑めば、終（つい）に出でず、乃ち兵を引きて去る。精兵が追擊し大いにこれを破る。王莽の末、天下亂る。光武が兄の伯升は兵を起し莽を討つ。莽將の甄阜、梁丘賜の為に敗れる。復た兵眾を收會（集め寄せ）し、還りて棘陽を保つ。阜、賜は勝に乘じて輜重を藍鄉に留め、精兵十餘萬人を引きて南に渡り、橫に沘水に臨む。兩山間を阻（さえぎ）りて營し、後の橋を絕ち、還る心無きを示す。伯升は是に軍士を大いに饗し、盟約を設けて、卒を休むこと三日、六部を為し、師を潛(入)し夜に（決）起して藍鄉を襲い取り、盡く其の輜重を獲（うば）う。明晨に、南より甄阜を攻め、江を下り兵は東南より梁丘賜を攻む。乏食にして陳は潰れ、遂に阜、賜を斬る。唐の輔公祐（賊）は其の偽將の馮惠亮、陳當世を遣し水軍を領いて博望山に屯せしむ。陳正通、徐紹宗は步騎を率いて青州山に軍す。河間王の孝恭が至り、壁を堅くして與に鬬わず、奇兵をして其の糧道を斷つ。賊は漸餒（だんだん飢え）、夜に我が營に薄（ちかづ）く。孝恭は安臥して動かず。明る日に、羸兵（弱兵）を縱（はな）ち以て賊壘を攻め、盧祖尚をして精騎を率い列陳し以てこれを待たしむ。俄にして壘を攻む者は敗走す。（賊は）出でて追い數里奔るに、祖尚の軍に遇い、與に戰い、大いにこれに敗れる。正通は營を棄てて走（にげ）る。
張預曰く、我が先に兵を舉ぐれば、則ち我は客と為り、彼は主と為る。客為れば則ち食は不足す、主と為れば則ち飽き餘有り。其の畜積を奪い、其の田野を掠め、糧を彼に因り、穀を敵に館すが若きは、則ち我は反りて飽き、彼は反りて饑う。則ち是に到れば客を變じて主と為す。必ずしも其の積聚を焚かず、其の農時を廢せず。然して後に能く敵を饑えしむ。或は彼を客と為ば、則ち其の糧道を絕つ。廣武君が奇兵を請いて以て韓信軍の後を遮絕せむと欲（す）は是なり。

（安能動之。）
曹操曰く、其の必ず愛（いつく）しむ所を攻め、其の必ず趨（走向、帰向）る所に出でば、則ち敵をして相い救わざること得せしめず（敵はやむをえず救う）。
李筌曰く、其の必す趨る所に出でて、其の不意の所を擊てば、其の必ず愛しむ所を攻めれば、救わざること得せしめず。
杜牧曰：司馬宣王は公孫文懿を遼東に攻む、遼水を阻（へだ）て以て魏軍を拒む。宣王曰く「賊は堅く高壘を營し以て我が師を老す。これを攻めれば正に其の計に入る。古人云く、『敵が高壘と雖も、得ずして我と戰わざるは、其の必ず救う所を攻める』。我が今直に襄平を指せば、則ち人內懼を懷き、懼れて戰を求む。これを破ること必なり」。遂に陳を整へて過ぐ。賊は兵を見て其の後に出ず。果してこれを來邀（来迎）す。乃ち縱擊（兵を発す）し、大いにこれを破る。竟に遼東を平らぐ。
陳皥曰く、『左傳』楚が宋を伐ち、宋は急を晉に告ぐ。晉の先軫曰く、「我は曹君を執りて（逮捕して）曹・衛の田を分けて以て宋人に賜う。楚は曹・衛を愛しめば、必ず許さず。（先軫は宋に斉と秦に賂を贈らせていた。だから斉と秦とは）賂を喜び (楚の)頑（かたくな）さに怒り、能く戰無きや（斉と秦が楚を攻めずにおれようか）？」遂に楚師を破る。
孟氏が註は曹操に同じ。
梅堯臣曰く、其の顧る所に趨れば、得て止めざらしむ。
王晳は李筌が註に同じ。
何氏曰く、其の愛しむ所を攻めば、豈に能く安んぞ視て動がずや？
張預曰く、彼方（まさ）に安じて守り、以て自ら固む術を為し、速戰を欲（せ）ず。則ち當に其の必ず救う所を攻め、已にして須べからく出ずを得ざらしむ。臾駢壁を堅くし、秦伯は其の裨將（副将）に挑み、遂に皆出でて戰う、是なり。

（出其所不趨，趨其所不意。）
曹操曰く、敵をして得て相い往きて救わしめず。
何氏曰く、敵人をして須べからく我に應ぜせしむ。

（行千里而不勞者，行於無人之地也。）
曹操曰く、空に出で虛を擊ち、其の守る所を避け、其の不意を擊つ。
李筌曰く、敵の無備に出でて、孤從（よ）り虛を擊つ、何人に之有りや？
杜牧曰く、梁の元帝の時、西蜀が帝を稱し、兵を率いて東に下り、將に元帝を攻む。西魏の大將の周文帝が曰く、「蜀を平らげ梁を制すは、茲の一舉に在り」。諸將に多く異同有り。文帝が將軍の尉遲迥にりて曰く、「蜀を伐つ事、一に以て公に委（ゆだ）ねむ。然るに計るに將に安くんぞ出でむや？」迥の曰く、「蜀と中國とは隔絕すること百餘年。其の山川の險阻を恃みて、我が師の至ることを虞（おも）わず。宜に精甲銳騎を以て、星夜これを奔襲（突然襲撃）せむ。平路は則ち倍道兼行（加速進行）し、險途は則ち緩兵漸進（減速）す。其の不意に出でて、其の腹心を衝けば、必ず向風不守（こちらに靡いてらず）」。竟に以て蜀を平らぐ。不勞と言うは、空虛の地、敵人の虞無く、行くも止るも我に在り。故に勞さず。
陳皥曰く、夫れ、空虛と言うは、敵人の不備を為すに止るに非らず。但に備うに嚴しからず、守るに固からず、將弱く兵亂れ、糧く少勢は孤（立）す。我が軍を整え臨めば、彼は必ず風を望（見）し自潰す。是れ我は勞苦せず、無人の地を行くが如し。
梅堯臣曰く、出所が不意。
何氏曰く、曹公が北に烏桓を征す。謀臣の郭嘉曰く、「兵は神速を貴しとす。今千里に人を襲うに、輜重多くば、以て趨利に難し（神速出来ない）。且（また）彼はこれを聞きて、以て備を為すを得る。輜重を留め、輕兵にて兼道（加速して間に合わせる）し以て出で、其の不意を掩（おそ）うに如かず」。公乃ち密に盧龍塞を出で、直に單于が庭を指す。虜の卒は公至るを聞きて、惶怖して合戰し、大いにこれを破る。蹋頓及び名王已下を斬る。又，唐の吐谷渾が邊を寇すに、李靖を以て西海道行軍の大總管と為し、輕途二千里、空虛の地を行き、吐谷渾を平らげて還る。故に、太宗曰く、「且（また）李靖が三千輕騎、深く虜の庭に入り、克ちて定襄（郡）を復す、古今未だ有らず」。
張預曰く、其の空虛を掩い、其の無備を攻めば、千里の征と雖も、人疲勞せず。鄧艾が蜀を伐つに、陰平の徑に由り、無人の地を行くこと七百餘里の若しとは、是なり。

（攻而必取者，攻其所不守也；）
李筌曰く、虞る（悪いことが起ると心配する）こと無くば取ること易し。
杜牧曰く、其の東に警（戒）して其の西を擊つ。其の前を誘いて其の後を襲う。後漢の張步と都劇は、弟の藍をして西安を守らしめ、又令して別將に臨淄を守らしむ。臨淄を去ること四十里、耿弇は軍を引きて其の間に營す。弇が視るに西安城は小にして堅、藍兵は又精（鋭）。臨淄は名（声）は大と雖も其の實攻め易し。弇は軍吏に攻具を治め、五日後に西安を攻むと令して、生口（俘虏）を縱（はな）ち歸らしむ。藍はこれを聞きて晨夜（早朝から深夜）城を守る。期至りて、夜半に、弇は諸將に蓐食を勒し（寝床で食事をとらしめ）、明（方）に及びて臨淄の城下に至る。護軍の荀梁等これと爭い、以て西安を速攻すべしと為す。弇が曰く、「西安は吾が攻めむと欲（す）と聞きて、日夜備を為す。臨淄は其の不意に出でば、必ず驚擾（驚慌騷亂）に至り、吾がこれを攻めば、一日にして必ず拔く。臨淄を拔かば、即ち西安が勢は孤（立）す。所謂一を擊ちて兩を得」。盡く其の策の如し。後漢の末、朱雋が黃中賊の帥韓忠を宛に擊つに、雋は長圍を作り、土山を起し、以て其の城內を臨む。鼓を鳴らし其の西南を攻むに因りて、賊は悉く眾これに赴く。雋は自ら精兵五千を將て其の東北を掩い、城を乘り越えて入り、忠は乃ち退きて小城を保ち、惶懼（恐懼）して（投）降を乞う。
陳皥曰：國家が上黨を征す。王宰は劉稹が天井の險を恃みとし、固守の計を為さずと知り、宰は悉く力攻して奪いて後に守る。稹は其の險を失い、終に其の巢穴に陷る（古巣に閉じ込められる）。
梅堯臣曰く、其の南を擊つと言ひて、實は其の北を攻む。
王晳曰く、其の虛を攻む。將不能と謂うは、兵は不精、壘は不堅、備は不嚴、救は不及、食は不足、心は不一爾。
張預曰く、善く攻む者は、九天の上に動き、敵人をして之能く備うこと莫からしむ。之能く備うこと莫くば、則ち吾の攻む所は、乃ち敵の守らざる所なり。耿弇が臨淄に克ち、朱雋が黃巾を討つは、但に其の一端のみ。

（守而必固者，守其所不攻也。）
杜牧曰く、尚守を攻めず、何ぞ況や其の所に攻むや？漢の太尉周亞夫は七國を昌邑に擊つ。賊は壁の東南の陬（すみ）に奔る。亞夫は其の西北を備えせしむ。俄にして賊の精卒が西北を攻むも、入るを得ず、因りて遁走し、追いてこれを破る。
陳皥曰く、敵が攻めざるを慮ること無く、我が守らざるを慮る。攻めざる所無く、守らざる所無し。乃ち用兵の計備わる。
梅堯臣曰く、賊が我を西に擊てば、亦、備うは東。
王晳曰く、守は實を以てす。謂うは、將は能、兵は精、壘は堅、備は嚴、救は及、食は足、心は一爾。
張預曰く、善く守る者は九地の下に藏れる。敵人をして能く測ること莫からしむ。能く測ること莫きは、則ち吾が守る所は、乃ち敵が攻めざる所なり。周亞夫は東南を擊つに西北に備う、亦、是其の一端なり。

（故善攻者，敵不知其所守；善守者，敵不知其所攻。）
曹操曰く、情（報）は泄（も）らさず。
李筌曰く、善く攻むは、器械多し。東魏の高歡が鄴を攻むは是なり。善く守るは謹みて備うなり。周の韋孝寬が晉州を守るは是なり。
杜牧曰く、攻取備禦の情は泄らさず。
賈林曰く、教令が行われ、人心は附され、備守すること堅固にして、微かに隱れ形無くば、敵人猶豫して（ためらって）、智措く所無し（考えが定まらない）。
梅堯臣曰く、善く攻む者は機密を泄らさず。善く守る者は周（あまね）く備え隙せず（一致結束している）。
王晳曰く、善く攻むとは、敵に可勝（勝てる）の隙有るを待ちて、速（すみやか）にこれを攻め、則ち其れ守ること能わざらしむ。善く守るとは、常に不可勝（勝たせない）を為し、則ち其れ攻むこと能わせしめず。不知者と云うは、攻守の計出づ所を知らざるのみ（どう攻略すべきか分からないこと）。
何氏曰く、攻守の謀を測ら可からしむを言う。
張預曰く、夫れ守れば則ち不足す、攻れば則ち餘り有る。所謂不足とは、力弱きに非ず。蓋し敵に示すに不足を以てせば、則ち敵は必ず來りて攻む。此れ是、敵は其の攻む所を知らず。所謂餘り有るとは、力彊きに非らず。蓋し敵に示すに餘り有るを以てせば、則ち敵は必ず自らを守る。此れ是、敵不其の守る所を知らず。情は外に泄らさず積まむ、攻守には。

（微乎微乎，至於無形；神乎神乎，至於無聲，故能為敵之司命。）
李筌曰：二遁用兵の奇正を言う。攻守は微妙、言說に形す可からず。微妙にして神乎（不思議）、敵の死生は形我に懸れり。故に「司命」と曰く。
杜牧曰く、微は靜なり。神は動なり。靜は守、動は攻。敵の死生は悉く我に懸る。故に天の司命の如し。
杜佑曰く、其の微妙、見る可からざる所を言う。變化の形、倏忽（瞬時なること）神の若きを言う。故に、能く敵の死生を料ること、天の司命の若し。
梅堯臣曰く、無形にして則ち微密、得て窺う可からず。無聲にして則ち神速、不可得て知る可からず。。
王晳曰く、微密にして則ち窺い難く、神速にして則ち應じ難し。故に能く敵の命を制す。
何氏曰く、武は虛實の法を論じ神微に至る。而して後に成功の極を見る。吾の實は、使敵をしてこれを視て虛と為さしめる。吾の虛は、使敵をしてこれを視て實と為さしめる。敵の實は、吾能くこれを虛と為さしめる。敵の虛は、吾能く其の實に非ざるを知る。蓋し敵は吾が虛實を識らず、而して吾能く敵の虛實を審かにす。吾敵を攻めむと欲（す）。彼の守る所が實為ると知れば、守らざる所は虛と為る。吾將に其の堅を避けて其の脆を攻む。其の亢（然）には批ち（軽く当たり）其の虛を擣（つ）く。敵が我を攻めむと欲（す）。彼が攻む所は不急と為（し）、攻めざる所は要と為（す）を知る。吾は將に敵に示すは虛、而して吾と鬬うは實。彼が形を示すが東に在れば、吾が備を設（もう）くは西。是の故に、吾が攻なり。彼は其の當に守る所を知らず。吾が守なり。敵は其の當に攻む所を料らず。攻守が變、虛實之の法に出ず。或いは九地之の下に藏（かく）れ、以て吾が守に喻（たと）う。或いは九天の上に動き、以て吾が攻に比（くら）ぶ。跡を滅して見る可からず。聲を韜（つつみ隠す）して聞く可からず。地より天下に出ずが若きは、倏（たちまちら）出でて間（はざま）に入れば、星耀き鬼行き、入るは無間の域、旋るは九泉の淵。微の微なるもの、神の神なるもの、天下の明（なる人）に至れど、目は其の形の微（かすか）なること窺うこと能わず。天下の聰（なる人といえども）、耳は其の聲の神なること聽くこと能わず。形有るものは形無きに至り、聲有るものは聲無きに至る。無に非ざる形なり、敵人は窺うこと能ず。無に非ざる聲なり。敵人は聽くこと能わず。虛實の變の極なり。善く兵を學ぶ者は、虛實の變に通じ、遂に以て神微の奧に入る可し。善くせざる者は、案然として微を尋ね神に窮す。而して其の用兵の跡を泥（にご）し，其の形聲を泯（け）すこと能わずして聞見さるに至るは、是神微の妙、固より虛實の變在るをを知らず。三軍の眾、百萬の師、安んぞ得て形と聲と無きや？但に敵人窺い聽くこと能わざるのみ。
張預曰く、攻守の術は微妙にして神密。無形の可覩，無聲の可聞に至れば、故に敵人の死生の命は皆て我において主（つかさど）れり。

（進而不可禦者，衝其虛也；退而不可追者，速而不可及也。）
曹操曰く、卒（にわか）に往き進み其の虛懈を攻め、退くこと又疾（はや）し。
李筌曰く、進むは、空虛懈怠を襲う。退くは、必ず輜重先の在り。行くこと遠くして大軍始めて退く、是以て追う可からず。後趙の王石勒が兵葛陂に在り。雨に苦しみて、師を鄴に班（引き返す）せんと欲（す）。晉人が其の後を躡（追跡）すを懼れ、張賓が計を用いて、輜重を先に行かしむ。遠くして及ぶ可からず。此れ筌が「速」字を以て「遠」と為（す）ものなり。
杜牧曰く、既にして其の虛を攻むは、敵必ず敗れる。敗喪（狼狽）の後に、安ぞ能く我を追うや？我故に得て疾を以て退く。
陳皥曰く、杜が說に非らず。曹公、張繡を圍む。城未だ拔けず。力未だ屈せずして去る。繡が兵出でて其の後を襲わんとし、賈詡これを止（と）むも、繡は聽かず。果して曹公に敗らるる所。繡が詡に謂りて曰く、「公既にして能く其の敗を知り、必ず能く其の勝を知る」。詡曰く、「復（また）敗卒を以てこれを襲う」。繡これによれば、曹公果して敗れよう。豈に是敗喪の後か？これを追うこと能わざるか？蓋し虛に乘じて進めば、敵禦（ふせ）く所を知らず、利を逐いて退けば、敵追う所を知らず、と言う。
杜佑曰く、其れ虛空を衝突す。
梅堯臣曰く、進みて其の虛に乘ずれば、則ち我を禦くこと莫し。其の弊に因りて退けば、則ち我を追うこと莫れ。
何氏曰く、兵進みて虛を衝く、兵退くは速を利とす。我能く敵を制せば、敵我を制すこと能わず。
張預曰く、壘を對して相持つ際には、彼の虛隙を見れば、則ち急進して擣（う）てば、敵豈に能く我を禦くや？利を獲て退かば、則ち速に壁に還りて以て自ら守る。敵豈に能く我を追うや？兵の情は速を主とし、風のごとく來り電のごとく往けば、敵は制すこと能わず。

（故我欲戰，敵雖高壘深溝，不得不與我戰者，攻其所必救也；）
曹操、李筌曰く、其の糧道を絕ち、其の歸路を守り、其の君主を攻む。
杜牧曰く、我を主と為し、敵を客と為せば、則ち其の糧食を絕ち、其の歸路を守る。我を客と為し、敵を主と為せば、則ち其の君主を攻めるが若きは、司馬の宣王が遼東を攻め、直に襄平を指したこと是なり。
梅堯臣曰く、其の要害を攻む。
王晳曰く、曹公曰く、「糧道を絕ち、歸路を守り、君主を攻む」。晳謂へらく、敵若し堅く守れば、但に能く其の必ず救う所を攻めば、則ち我と戰う。耿弇が巨里を攻めむと欲（し）以て費邑に致るが若き亦是なり。
何氏曰く、魏將の司馬宣王が公孫文懿を征すが如きは、舟を泛（う）かべ潛（ひそ）かに遼水を濟（わた）り、長圍を作る。忽ち賊を棄てて襄平に向う。諸將言わく、「賊を攻めずして長圍を作り、以て眾に示す所に非ず」。宣王曰く、「賊は堅く高壘を營し、以て吾が兵を老（疲労）せむと欲（す）。古人が言に曰く、『敵高壘と雖も、我と戰わざるを得ざるは、其の必ず救う所を攻むなり』と。賊が大眾此に在れば、則ち窟穴は虛なり。我が直に襄平を指（め）ざせば、必ず人懷內懼し（平壌の民を案じて）、懼れて戰を求む。これを破ること必（定）なり」。遂に陳を整えて過ぐ。賊は見て兵其の後に出づ。果してこれを邀（むか）える。宣王、諸將に謂りて曰く、「其の營を攻めざる所以、正に此に致らむと欲（す）、失う可からず」。乃ち兵を縱えて逆擊し、大いにこれを破る。三戰して皆て捷（すばやく勝つ）。唐の馬燧が田悅を討つに、時に軍糧は少く、悅は壁を深くして戰わず。燧は諸軍に令して十日の糧を持たしめ、進みて倉口に次（やど）り、悅と洹水を夾みて軍す。李抱真、李芃問いて曰く、「糧少なくして深く入るは何ぞや？」。燧曰く、「糧少くば、速戰を利とす。兵法は人に致るを善しとし、人に致らせず。今、田悅と淄、青、兗の三軍は首尾を為し、計りて戰わずして我が師を老せむと欲（す）。兵を分ちて其の左右を擊つが若きは、兵少んくして未だ必ず可からず。悅且（また）來りて教（救？）うも、是れ前後に敵を受く。兵法に其の必ず救すを攻むと謂う所、彼は固より當に戰うべし。燧は諸軍を合為（し）てこれを破る」。燧乃ち三橋を造り、道を洹水に逾（こ）し、日に戰を挑むも、悅は敢えて出でず。恒州の兵は以て軍少なく、燧の為に幷せらる所を懼れて、軍を引きて悅に合わす。悅と燧とは明る日に復（また）戰を挑む。乃ち萬人を伏兵として、燧を邀えんと欲（す）。燧は乃ち諸軍を引きて半夜に皆食し、雞鳴時に先じ、鼓を擊ち角を吹き、師を洹水の傍に潛ませ、徑（近道）を魏州に赴（ゆ）く。令して曰く、「賊至るを聞かば、則ち止りて陳を為せ」。又、百騎に令して鼓角を吹かせ、皆て後に留め、仍りて薪を抱き火を持ち、軍が發し畢（おわ）るを待ち、鼓を止めて、其の旁に匿れ、悅軍が渡り畢るを伺い、其の橋を焚け。軍が行くこと十數里、乃ち淄、青、兗州の步騎四萬餘人を率いて、橋を踰えて其の後を掩う。風に乘じて火を縱（はな）ち、鼓譟（太鼓を鳴らしときの声を挙げる）して進む。燧は乃ち坐甲（武装して敵を待つ）して令して動くこと無く、命じて草を前（き）り除き、荊棘を斬り、百步に廣げて以て陳と為（す）。勇力を募り五千餘人を得、分けてと為（し）、以て賊が至るを俟つ。悅軍が至る比（ころ）には、則ち火は止み、氣は乏しく、力は少しく衰える。乃ち兵を縱ちてこれを擊つ。悅軍は大敗し、悅は橋に走（にげ）るも、橋は已に焚（や）けり。悅軍は亂れ、水（河）に赴きて、斬首二萬、淄、青の軍は殆んど盡きる。
張預曰く、我が客と為り、彼が主と為り、我が兵彊くして食少なく、彼の勢弱く糧多くすも、則ち利在らば必ず戰う。敵人に金城湯池の固有りて、得て其の險を守らず、必ず來りて我と戰うは、其の顧愛す所を攻め、相救援せしむに在り。楚人が宋を圍み、晉將これを救うが若し。狐偃曰く、「楚始めて曹を得て新たに衛に婚ぐ。若し曹衛を伐てば、楚は必ずこれを救い、則ち宋は免がれる」、と。これによりで（囲みを）解く。又、晉の宣帝公孫文懿を討つに、忽にして賊を棄てて襄平に走り、其の巢穴を討つ。賊果して出でてこれを邀え、遂に逆に擊ち、三戰して皆捷つは、亦、其の義なり。

（我不欲戰，畫地而守之，）
曹操曰く、軍は煩を欲（せ）ず。
李筌曰く、境を拒み自ら守る。若し、敵が境に入らば、則ち『天一遁甲』の真人閉六戊之法を用い、刀を以て地に畫して營を為（す）。（[奇門遁甲秘笈大全: 卷二十五- 中國哲學書電子化計劃](https://ctext.org/wiki.pl?if=gb&chapter=889554)　39真人閉六戊之法）
孟氏曰く、物を以て地に畫して守るとは、其の易きに喻う。蓋し、我能く敵人の心に戾（もと）れば、敢えて至らず（猛氏は相手の心に、攻めれば善くないことが起ると疑念と不安を抱かせればよいとする）。

（敵不得與我戰者，乖其所之也。）
曹操曰く、乖は戾なり。其の道に戾り、示すに利害を以てせば、敵をして疑わしむ。
李筌曰く、乖は異なり。奇異を設けて疑わしむ。是を以て敵を得て我と戰う可らざらしむ。漢の上谷の太守李廣は馬を縱（はな）ち卸鞍（下馬）し、疑わす。
杜牧曰く、言うは、敵來りて我を攻む。我與に戰わず。權變を設け以て疑わしめ、敵人をして疑惑し決せしめず。初來の心に乖戾（そむきもとり）、敢えて我と戰わず。曹公が漢中の地を爭い、蜀先主（劉備）が拒む。時に將の趙雲が別屯を守り、將は數十騎、輕く出でて、卒に大軍に遇う。（趙）雲は且つ鬬い且つ却き、公軍は追いて至り、雲を圍む。（雲は）營に入りて、大きく門を開け、旗を偃（ふ）せ鼓を息（やす）ませしむ。曹公が軍は伏（兵）有りと疑いて引きて去る。諸葛武侯（諸葛亮）が陽平に屯し、魏延や諸將兵を幷せて東に下らしめ、武侯は惟に萬人を留めて城を守る。候は司馬宣王に白（もう）して曰く、「亮は城中に在り、兵は少く力は弱し」。將士は色を失うも、亮は時に意氣は自若（落ち着き慌てることなし）として、軍中に敕して悉く旗を臥（ふ）せ鼓を息（やす）ませ、得て輒（すなわ）ち出でず、四門を開きて、地を掃（は）き却きて灑す（水をまく）。宣王は伏有るを疑いて是より引きて去り、北山に趨る。亮が參佐に謂りて曰く、「司馬懿は吾に設伏有りと謂いて、循（したが）いて山に走る」。宣王は後に知りて、頗（すこぶ）るに恨に以為（おも）う。曹公と呂布は相持し、公軍は出でて麥を收（穫）し、布は眾卒を領いて至る。公は營して止まり、千人が出陳し、半を堤下に隱すこと有り。呂布は遲疑して（疑い迷いためらって）敢えて進まず。曰く、「曹操は多（さわ）に詐る、な伏中に入りそ」。遂に兵を引きて去る。
陳皥曰く、『左傳』楚の令尹子元が鄭を伐ち、純門（鄭の外郭門）より入りて、逵市（郭門道上の市）に至るに、（内城門に施す）懸門發せず（閉じていない）。子元曰く、「鄭に人有らむ」。乃ち還る。
賈林曰く、疑兵を敵之を惡む（敵が嫌がる）所に置き、形勝の地に屯營せば、未だ壘塹を修めずと雖も、敵人は敢えて來りて我を攻めず。
梅堯臣曰く、畫地とは易（やすき）に喻う。其の道に乖（もと）りて示すに利を以てし、其れ疑わしめて敢えて進まず。
王晳曰く、畫地とは易且つ明を言う。之を制せば必ず道有り。
張預曰く、我が主と為り、彼が客と為る。我は糧多くして卒寡く、彼は食少なくして兵眾ければ、則ち利在りて戰わず。營壘の固を為さずと雖も、敵は必ず敢えて來りて我と戰わず。示すに疑形を以てし、其の往く所に乖（もと）ればなり。楚人が鄭を伐ち、鄭が懸門を發せざるが若し。楚言に効（のっと）りて出ず。楚師敢えて進まずして遁（のが）る。又、司馬懿が諸葛亮を攻めむと欲（おも）い、亮は旗を偃せ鼓を臥せ、門を開き却きて灑す（水を撒く）。懿は伏兵有るを疑いて、遂に引きて去る。亦其の義なり。

（故形人而我無形，則我專而敵分。）
杜佑曰く、我は專に一となして敵を分散す。
梅堯臣曰く、他人には形有りて、我が形見（あら）われず、故に敵は兵を分け以て我に備う。
張預曰く、吾が正、敵をして以て奇を為すと視しむ。吾が奇、敵をして以て正を為すと視しむ。人を形せしむものなり。奇を以て正と為し、正を以て奇と為せば、變化は紛紜とし、敵をして測らしむこと莫し。形無きものなり。敵の形既に見（あら）われれば、我は乃ち眾を合わせ以てこれに臨む。我が形彰（あきら）かならずば、彼は必ず勢を分かちて以て防備す。

（我專為一，敵分為十，是以十攻其一也，）
杜佑曰く、我は敵の形を料り見、其の虛實を審（つまびらか）にす。故に備う所は少く、專（あつ）めて一屯と為す。我が專を以て、彼の散卒を擊てば、十を共と為して一を擊つ。
梅堯臣曰く、一を離（散）せしめ十と為さば、我は常に十分を以て一分を擊つ。

（則我眾而敵寡；）
杜佑曰く、我は專（あつ）めて一と為す、故に眾。敵を分けて十と為す、故に寡。
張預曰く、敵が虛實を見れば、勞して多く備えず，故に專めて一屯を為す。彼は則ち然らず。我が形見（あら）われず、故に分けて十處と為す。是は我が十分を以て、敵の一分を擊つなり。故に、我は眾ならざるを得ず、敵は寡ならざるを得ず。

（能以眾擊寡者，則吾之所與戰者，約矣。）
杜牧曰く、約は猶少のごときなり。我は塹を深くし壘を高くし、跡を滅し聲を韜し（つつみ隠す）、出入に形無くば、攻め取るに測ること莫し。或は輕兵健馬を以て、其の空虛を衝く。或は彊弩長弓を以て、其の要害を奪う。左を觸れて右を履（ふ）み、後を突きて前に驚（おど）す。晝日に之を誤らすに旌旗を以てし、暮夜に之を惑わすに火鼓を以てす。故に、敵人は畏れ懾（おび）え、兵を分けて防ぎ虞（おそれ）る。譬えば山に登り城を瞰（みおろ）し、簾を垂れて（敵に中を見させない）外を視れば、敵人の分張（分布）の勢を我は則ち盡く知り、我が攻守の方は、敵則ち測らざるが如し。故に、我は能く專めて一にして、敵は則ち分離す。專一は力全きにして分離は力寡し。全を以て寡を擊つ。故に能く必ず勝つ。
杜佑曰く、約して少なれば易く勝つを言う。
梅堯臣曰く、專を以て分を擊てば、則ち我が敵とする所は少し。
王晳曰く、多く之に形を為し、敵をして己に備えしめ、其の實、攻むは則ち形無し。故に我は專、敵は分。專は則ち眾、分は則ち寡。十が一を攻む、大約言耳（というようなことである）。
何氏は杜牧が註に同じ。
張預曰く、夫れ勢は聚りて彊く、兵は散じて弱し。眾彊の勢を以て、寡弱の兵を擊てば、則ち眾力少くして成功すること多し。

（吾所與戰之地不可知，）
杜佑曰く、言うは、舉動は微密にして、情は見（あら）わる可からず。彼をして出ず所を知り吾が舉ぐる所を知らしめず、(彼が)舉ぐ所を知りて吾が集る所を知らしめず。
張預曰く、形勢無きが故なり。

（不可知，則敵所備者多；）
梅堯臣曰く、敵知らずんば、則ち處處に備を為す。

（敵所備者多，則吾所與戰者，寡矣。）
曹操曰く、形を藏（かく）して敵を疑わしめば、則ち其の眾を分離して我に備う。少くして易く擊つを言う。
王晳曰く、敵と必ず戰う地を、敵をして之を知らしむ可からず。知れば則ち力を幷せ得て我を拒む。曹公曰く、「形を藏せば則ち敵は疑う」。
張預曰く、吾が車果して何くに出で、騎果何くに來り、徒果して何に從うか測ること能わずせば、故に、其の眾を分離して、在る所に輒（そのつど）備を為し、遂に眾を散して弱り、勢を分けて衰うに致る。是を以て吾接戰の處とする所を大眾を以て孤軍に臨むなり。

（故備前則後寡，備後則前寡，備左則右寡，備右則左寡。無所不備，則無所不寡。）
杜佑曰く、言うは、敵の備う所は多くして、則ち士卒分散せざること無くして少たり。
梅堯臣曰く、備う所は皆て寡なり。

（寡者，備人者也；眾者，使人備己者也。）
曹操曰く、上に所謂る形を藏さば敵は疑うとは、則ち其の眾を分離し以て我に備わしむことなり。
李筌曰く、兵を陳す地は、敵人をしてこれを知らしむ可からず。彼疑わば則ち眾を離して我に備うを謂う。
杜牧曰く、戰う所の地は、敵人をしてこれを知らしむ可からず。我が形泄（も）れずんば、則ち左右、前後、遠近、險易を敵人は知らず。亦、我が何處に來り攻め、何地に會戰すかを知らず。故に兵を分け衛に徹し、處處を防備す。形を藏すは眾、多を分くは寡。故に眾は必ず勝ち、寡は必ず敗れる。
孟氏曰く、人に備えば則ち我は（分）散す、我に備えば則ち彼は分く。
杜佑曰く、敵が分散して少きは皆て先ず人に備うがなり。敵以て己に備う所多きは、我が專（あつ）まるに由りて眾となるが故なり。
梅堯臣曰く、敵をして愈（いよいよ）備わしむれば、則ち愈寡（すく）なし。
王晳曰く、左右前後俱（ことごとく）備えば則ち俱寡なし。
何氏は諸注に同じ。
張預曰く、左右前後、備えを為さざる處無くば、則ち兵寡ならざる處無し。寡なる所以は、兵を分けて廣く人に備うが為（ため）なり。眾なる所以は、勢を專めて人をして己に備えしむが為なり。

（故知戰之地，知戰之日，則可千里而會戰。）
曹操曰く、度量を以て空虛會戰の日を知る。
李筌曰く、戰の地を知れば、則ち舟車步騎の便する所なり。魏武（曹操）は北土未だ安からずを以て、鞍馬（馬と馬具）を捨て、舟揖（船団）に仗（よ）り、吳越と彊を爭い、是以て黃蓋（赤壁の戦いでは、周瑜に対し曹操軍の艦船を火攻めすることを進言）の敗有り。吳王濞（劉濞：りゅうび）は吳楚の眾を驅（か）りて、梁鄭の間に奔馳（疾走）す。此、戰の地や日を知らざる者。故に、『太一遁甲』に曰く、「法（のり）三門五將を計せば、主客成敗は則ち知る可し。是に千里に會戰して勝つ」。
杜牧曰く、宋武帝は朱齡石（しゅれいせき）をして譙縱（しょうじゅう）を蜀に伐うたしむ。宋武が曰く、「往年、劉敬宣（りゅうけいせん）は內水を出でて黃武に向うも、功無くして退く。賊が謂うに、我今外水より來るに應じ、而して我當に其の不意に出ずを料る。猶內水より來たるがごとし。此の如くせば必ず重兵を以て涪城を守り、以て內道に備う。若し黃武に向えば、正に其の計に墮つ。今、大眾を以て外より成都を取る。疑兵を內水に向け、此則ち敵の奇を制すなり」。而して此の聲先馳し、賊虛實を知るを慮り、別に函書有りて、全て封して齡石に付く。函の邊書に曰く、「白帝に至らば乃ち開け」。諸軍未だ處分す所由を知らず、白帝に至る。發書に曰く、「眾軍悉く外水より成都れ。臧熹、朱林は中水より廣漢を取り、羸弱をして高艦十餘に乘せ、內水より黃武に向わしめよ」。譙縱は果して重兵を以て內水に備え、齡石はこれを滅した。
陳皥曰く、杜が註は戰の地を知るを言うに止り、未だ戰の日を知るを敘（のべ）ず。我が敵を伐つが若きは、期至らば得て我と戰わしめず、敵來りて我を侵さば、我は必ず預じめ備えて以てこれに應ず。項羽が曹咎（そうきゅう）に謂りて曰く、「我、十五日に必ず梁地に定む、復、將軍と會わむ」。苟しくも必戰の日を知らずんば、安（いづくん）ぞ能く約を為さむや？
孟氏曰く、度量を以て空虛を知り、先（まず）は戰地の形を知り、又必戰の日を審（つまびらか）にせば、則ち千里に期會（期日を約して集合）す可し。先に往（ゆ）きて以て待つ。若し、敵が已に先に至らば、往かず以て勞せしむ可し。
杜佑曰く、夫れ善く戰う者は、必ず戰の日を知り、戰の地を知る。道を度り期を設け、軍雜卒を分け、遠きは先に進み、近きは後に發せば、千里の會は、同時にして合う。若し都市に會せば、其の會地の日は、敵に知らしむこと無かれ。これを知れば則ち備處す所少し。知らずば則ち備處す所多し。備うこと寡なれば則ち專（あつま）り、備うこと多ければ則ち分る。分かれば則ち力散（さん）じ、專れば則ち力全（まっとう）す。
梅堯臣曰く、若し能く必戰の地、必戰の日を度（はか）れば、千里の遠きと雖も、期を剋して（約束した日に）與（とも）に戰う可し（ことが出来る）。
王晳曰く、必ず先づ地の利と敵情を知り、然る後に兵法の度量を以て、其の遠近を計り、其の空虛を知り、敵が趣き應ず所及び戰期を審（つまびらか）にす。是の如くせば、則ち千里と雖も會戰して敵を破る可し。故に、曹公の曰う「度量を以て虛空會戰の日を知る」とは是なり。
張預曰く、凡そ兵を舉げて敵を伐つに、戰う所の地、必ず先づこれを知れ。師至る日に、能く敵人をして如期して（予定通り）來たらし、以て我と戰わしむ。戰の地と日を知り、則ち備う所は專（あつ）め、守る所は固めば、千里の遠きと雖も、以て赴きて戰う可し。蹇叔（けんしゅく）が、晉人は必ず崤に於いて師を禦ぐと知るが若きは、是、戰地を知るなり。陳湯（ちんとう）が、烏孫（うそん）は兵を圍み五日にして必ず解くと料るは、是、戰の日を知るなり。又、孫臏が、龐涓を馬陵に要（むか）えるに、日暮に必ず至ると度るが若きは是なり。

（不知戰地，不知戰日，則左不能救右，右不能救左，前不能救後，後不能救前，而況遠者數十里，近者數里乎？）
杜牧曰く、管子曰く、「計未だ定らずして兵を出だせば、則ち戰いて自ら毀（こぼ）つ」。
杜佑曰く、敵已に先に形勢の地に據り、己が方利に趣き戰わむと欲（せ）ば、則ち左右前後、進退を疑い惑いて、相救うこと能はずんば、況や數十里の間をや？
梅堯臣曰く、不救うこと能わざるは、寡なり。左右前後、尚救うこと能わずんば、況や遠きをや？
張預曰く、敵人が何の地に兵を會し、何の日に戰に接すを知らずんば、則ち備う所は專（あつ）まらず、守る所は固からず。勍敵（強敵）に忽遇せば（出会せばたちまち）、則ち倉遽して（あわてふためき）これと戰えど、左右前後猶相援くこと能わず、又況や首尾の相去ること遼（とお）きをや？

（以吾度之，越人之兵雖多，亦奚益於勝敗哉？）
曹操曰く、越人相聚りて、紛然として無知なり。或に曰く吳越は讎國（仇国）なり。
李筌曰く、越は過なり。戰地及び戰日を知らず。兵が人（他兵）に過ぐ（勝る）と雖も、安（いづく）んぞ能く其の勝敗を知らむや？
陳皥曰く、孫子、吳王の闔閭が為に兵を論ず。吳と越は讎なり、故に、越と言う。過人の兵と謂うは、義に非ず（意味が違う、過人でなく越人）。
賈林曰：戰の地を知らず、戰の日を知らずんば、士眾多しと雖も、勝敗の政を制すこと能わず、亦、何んぞ益なりや？
梅堯臣曰く、吳越は敵國なり。越人を言いて多しと雖も、亦當に我が為にこれを分てば寡なり。
王晳曰く、此れ武（孫武）が相たる時に敵を料るなり。越兵多しと雖も、苟も相い救うに善からず、亦、勝敗の數に益無きを言う。
張預曰く、「吾」字を「吳」に作るは、字の誤なり。吳越は鄰國、數（しばしば）相い侵し伐つ、故に下文に云く、「吳人と越人は相い惡（にく）む」。越國の兵、眾多しと曰うと雖も、但に戰の地、戰の日を知らず、當に其の勢を分ちて弱きを言う。

（故曰：勝可為也。）
杜牧曰く、勝を為すは我に在り、故に、為す可きと言う。
孟氏曰く、若し敵をして戰地や期日を知らしめずんば、我が必勝、常に有る可し。
梅堯臣は杜牧が註に同じ。
王晳、何氏は孟氏が註に同じ。
張預曰く、勝を為すこと我に在るが故なり。〈形〉篇に云く、「勝は知る可し而して為す可からず」。今に「勝可為」と言うは何ぞ？蓋し、〈形〉篇に攻守の勢を論じ、敵に若し備有れば、則ち必ず為す可からずと言うなり。今、則ち主すに越兵を以てすに（越人を制御するには）、「越人を度りて、必ず戰う所の地と日を知ること能わざらしむ」を言う。故に「為す可し」と云う。

（敵雖眾，可使無鬬。）
杜牧曰く、以下四事、これを度量せば、敵兵眾しと雖も、其れ我と鬬いて勝つこと能わざらしむ。
孟氏曰く、敵が多兵と雖も、我は能く多に變詐を設け、其の形勢を分け、能く力を併せしめず。
賈林曰く、敵が眾多と雖も、己が兵情を知らずんば、常に急（せか）せて自ら備えしめ、謀り鬬う暇（いとま）あらしめず。
梅堯臣曰く、苟しくも能く寡にして、何（いづくん）ぞ鬬うこと有らむ？
王晳曰く、多益にして救わずんば、奚（いづくん）ぞ恃みて鬬う所たらむ？
張預曰く、其の勢を分散し、力を齊（そろ）えて同進すること得さしめずんば、則ち焉（いづくん）ぞ能く我と爭わむ？

（故策之而知得失之計，）
李筌曰く、用兵は、勝を取る兵法を制す可し。『太一遁甲』の「五將」の計、以て關格掩迫之數を定め、得失を知る可し。
孟氏曰く、敵情を策度し、其の施為（行動）を觀れば、則ち計數知る可し。
賈林曰く、樽俎帷幄（宴席と軍議）之間に、策を以て籌（**籌**略；謀略）し、我が得と彼が失の計を皆先ず知る。
杜佑曰く、敵情を策度し、其の施す所を觀て、計數を知る可し。
梅堯臣曰く、彼が得失の計、我は算策を以て知る。
王晳曰く、其の敵情を策（はか）り、以て得失の數を見る。
張預曰く、敵情を籌策し、其の計の得失を知るとは、薛公が黥布之三計を料るが若き是なり。

（作之而知動靜之理，）
李筌曰く、雲氣、風鳥、人情を候望（伺望；偵察）せば、則ち動靜知る可し。王莽の時、王尋（おうじん）昆陽に征し、雲氣有りて壞山の（山が崩れるが）如くして、當に營して墜ちること、地を去ること數丈（地上数丈まで乱下してきた）、而して光武（劉秀）は其の必敗を知る。梁の王僧辯（おうそうべん）の營上に堤の如き氣有りて、侯景（こうけい）其の必勝を知る。風鳥、貪豺（貪欲な山犬）の類なり。此れ筌が「作」字を以て「候」字と為すものなり。
杜牧曰く、作（おこす）は激作なり。言うは、敵人を激作し、其れ我に應じせしめ、然して後に、其の動靜理亂（治乱）の形を觀るなり。魏の武侯曰く、「兩軍相當りて、其の將を知らず、如何？」吳起曰く、「賤勇の者を將に令し銳にして擊ち、交合して北（に）ぐ。北げて罰すこと勿れ。敵の進退を觀て、一は坐し、一は起つ。其の政、理を以てせば、奔北（逃走）すを追わず、利を見て取らず。此の將に謀有り。其れ悉く眾が北（にげる）を追うが若きは、旗幡は雜亂し、行止は縱橫し（バラバラとなり）、貪利を得ることに務む。此の類の若きは、將令行われず。擊ちて疑い勿し」。
陳皥曰く、作は為なり。之に利害を為す。敵をして之に赴かしめば、則ち進退の理を知る。
賈林曰く、善く覘候（窺視；偵察）するは、必ず其の動靜の理を知る。
杜佑曰く、喜怒動作、其の舉止を察せば、則ち情理得可し。故に、動靜權變を知りて、其の勝負を為す。
梅堯臣曰く、彼の動靜の理、我の發す所に因りて見（あら）わる。
王晳曰く、其の理を候（うかが）いて當に動し以て否とす。
張預曰く、發作すことを久しくし（発作的に対応せず）、其の喜怒觀れば、則ち動靜の理、得て知る可し。晉の文公が宛春（使者である楚の大夫）を拘（とら）え、以て楚の將の子玉を怒らしむが若き。子玉遂に晉軍（の退却）に乘ず、是其れ動に躁す（焦る）なり。諸葛亮は巾幗（髪飾り）に婦人の飾を遺（つかわ）し、以て司馬宣王を怒らしむも、宣王終に出でて戰わず。此れ是、其れ靜に安（やす）んずなり。

（形之而知死生之地，）
李筌曰く、夫れ、陳を破り奇を設け、或は旗鼓を偃（ふ）す。之以て弱きを形（あら）わす。或は虛に竈火や幡幟を列ねる。之以て彊きを形わす。之を投ずに死（地）を以てし、之を致すに生（地）を以てす。是死生は地に因りて成るを以てす。韓信が井陘を下り、劉裕が大峴を過ぐ、則ち其の義なり。
杜牧曰く、死生の地。蓋し戰地なり。之を死地に投ぜば必ず生き、之を生地に置けば必ず死す。言うは、我多方より敵人を誤撓（撹乱）し、以て其の我に應ず形を觀る。然して後に隨いてこれを制せば、則ち死生の地を知る可し。
陳皥曰く、敵人に既に動靜有れば、則ち我其の形を見るを得。謀有るは處す所の地必ず生（地）、謀無きは投ず所の地必ず死（地）なり。
孟氏曰く、形相（形状）敵情、其の據る所を觀れば、則ち地の形・勢・生・死得て知る可し。
賈林曰く、理す所の兵形を見れば、則ち其の死所を知る可し。
梅堯臣曰く、彼の生死の地、我形に因りて見て識る。
何氏、杜牧が註と同じ。
張預曰く、之を形わすに弱を以てせば、則ち彼は必ず進む。之を形わすに彊を以てせば、則ち彼は必ず退く。其の進退の際に因りて、則ち彼の據る所の地死か生かを知る。上文に云く、「善く敵を動すは、之を形わし、敵必ずこれに從う」。是なり。死地は傾覆の地を謂う。生地は便利の地を謂う。

（角之而知有餘不足之處。）
曹操曰く、角は量なり。
李筌曰く、角は量なり。其の力精勇を量れば、則ち虛實知る可し。
杜牧曰く、角は量なり。言うは、我が有餘を以て、敵人の有餘を角量し、我が不足を以て、敵人の不足を角量す。管子曰く、「善く攻むとは、眾を料り以て眾を攻め、食を料り以て食を攻む。食存（あ）らずんば攻めず。備存らずんば攻めず」。司馬宣王が遼東を伐つに、司馬の陳珪曰く、「昔上庸を攻むに、八部並び進み、晝夜息（やす）まず。故に、能く一旬（10日）の半にして、堅城を拔き孟達を斬る。今は遠來し、而るに更に安緩とす。愚（私）竊（人知れず）惑う」。王曰く、「孟達が眾は少く、而して食支うは一年。吾は將に達に四倍す。而るに糧は一月に淹（み）たず。一月を以て一年を圖るに、安んぞ速（すみ）やか可からざらん？（迅速たれ）。四を以て一を擊てば、正に命半解すれど、猶當にこれを為すがごとし。是以て死傷を計らずして、糧と競う（兵数より糧が尽きれば負け）。今は、賊が眾にして我は寡、賊は飢え我は飽（十分）、雨水にして乃ち爾（なんじ）功力を設けざる（長雨に攻撃は無用）。賊が糧は垂れ盡そう、當に能を示すに以てこれに安んずべし」。既にして雨止みて、晝夜攻めて、竟に遼東を平らぐ。
梅堯臣曰く、彼の有餘不足の處、我以て角量して審にす。
王晳曰く、角は相角を謂う。彼我の力角れば、則ち有餘不足の處を知る。然して後に、以て攻守の利を謀る可し。此而して上は亦敵を量り戰を知る所以。
張預曰く、有餘は彊なり。不足は弱なり。敵の形を角量し、彼の彊弱の所を知る。唐の太宗曰く「凡そ陳に臨むは、常に吾が彊を以て敵の弱に對す。常に吾が弱を以て敵の彊に對す」。苟しくも角量に非ずんば、安ぞ得てこれを知るや？

（故形兵之極，至於無形；無形，則深間不能窺，智者不能謀。）
李筌曰く、敵に形す妙は、無形に入る。間は窺（うかが）う可からず、智は謀（はか）る可らず。是形を謂うなり。
杜牧曰く、此れ言うは、用兵の道、臻極（しぎょく；極致）に至り、無形に過ぎず。形無くば則ち間者有りて深く來り我を窺うと雖も、我が虛實を知ること能わず。彊弱は外に泄（も）れず、智能の士有りと雖も、亦我を謀ること能わず。
梅堯臣曰く、兵は本より形有り。虛實を露（あら）わさずんば、是以て形無く、此れ極致なり。間者をして以て情釣（情報収集）せしめ、智者をして以て謀料（謀略）せしむと雖も、得可しや？
王晳曰く、兵を制すこと無形に形す。是極致を謂う。孰（たれ）か能く窺いて謀るや？
何氏曰く、行列は外に在り、機變（臨機応変）は內に在り、形に因りて變を制す。人窺い測ること難く、神微と謂う可し。
張預曰く、始め虛實を以て敵に形せば、敵は測ること能わず。故に其の極致は卒に（最終的に）無形に歸すこと。既に形覩（み）る可くも無く、跡求む可くも無くば、則ち間者其の隙を窺うこと能わず、智者以て其の計を運（めぐ）らすこと無し。

（因形而錯勝於眾，眾不能知。）
曹操曰く、敵形に因りて勝を立つ。
李筌曰：錯は置なり。形險の勢を設け、士卒の勇に因りて勝を取る。軍事は尚密にして、眾人の知る所に非ず。
杜牧曰く、形を窺いて勝敗を置く可し。智者に非ずんば能わず。固より眾人が能く得て知る所に非ず。
梅堯臣曰く、眾は我能く勝を置くを知るも、敵の形に因るを知らず。
何氏曰く、敵に因りて勝を置く、眾知ること能わず。
張預曰く、敵變動の形に因りて以て勝を置く。眾人の能く知る所に非ず。

（人皆知我所以勝之形，而莫知吾所以制勝之形。）
曹操曰く、以て一形の萬形に勝つとせず。或に曰く、知を備えず。勝を制すは、人皆吾が勝つ所以を知る。吾が敵形に因りて勝を制すを知ること莫し。
李筌曰く、戰勝、人はこれを知る。勝を制す法は幽密（目に見えず隠れている）、人知ること莫し。
杜牧曰く、言うは、已にして勝ちて後に、但に我が敵人を制すを知る。敗形有らしむは、本より我に自（よ）る。然る後に、我能くこれに勝つ。上文に云く、「近づきてこれを遠に示す。遠ざかりこれを近に示す。利してこれを誘う。亂してこれを取る。實なればこれに備う。彊なればこれを避く。怒らせてこれを撓（みだ）す。卑してこれを驕らせる。佚してこれを勞せしむ。親してこれを離す（計篇、兵者詭道）」。斯れ皆勝を制す道。人これを知ること莫し。
陳皥曰く、人但に我が敵に勝つ善を知りて、我が敵の敗形に因るを知ること能わず。
梅堯臣曰く、勝を得たる跡を知りて、勝を作る象を知らず。
王晳曰：韓信が背水、拔幟の若きは是なり。人但に水上軍を殊に死戰と見るも、敗る可からずして、趙軍驚亂して遁走すに及ぶ。吾が能く制し、これを然らしめるものが何の道を以てすかを知らず。
張預曰く、勝を立つ跡、人皆これを知る。但に吾が敵形に因りて此の勝を制すを測ること莫し。

（故其戰勝不復，而應形於無窮。）
曹操曰く、重復せずして動きてこれに應ず。
李筌曰く、復（また）前の謀をせず以て勝を取る、宜（よろしき）隨（まま）に變を制す（臨機応変）。
杜牧曰く、敵は每（ことごと）に形有り、我は則ち始め能く隨いてこれに應じ以て勝を取る。
杜佑曰く、死官なり（夫れ将は、上は天に制せられず、下は地に制せられず、中は人に制せられず。故に兵は凶器なり。争は逆德なり。将は死官なり。故に、已むを得ずしてこれを用う；尉繚子）。
賈林曰く、敵形に應じて勝を制すは、乃ち窮まり無し。
梅堯臣曰く、故態に執せず（元形に固執しない）、形に應じて機有り。
王晳曰く、夫れ勝を制す理は惟一つ、而るに勝つ所の形は窮まり無し。。
何氏曰く、已に勝ちたる分は、再び用いず。敵來りなば斯れ應ず。前の法に循わず。故に窮まらず。
張預曰く、已に勝ちたる後に、復（また）更（さら）に前の謀を用いることなし。但に敵の形に隨いてこれに應じ、奇に出でるは窮まり無し。

（夫兵形象水，）
孟氏曰く、兵の形勢は水流の如し。遲速の勢に常無し。

（水之形，避高而趨下；）
梅堯臣曰く、性なり。

（兵之形，避實而擊虛。）
梅堯臣曰く、利なり。
張預曰く、水の下に趨るは則ち順、兵の虛を擊つは則ち利。

（水因地而制流，）
杜牧曰く、地の下に因る。
梅堯臣曰く、高下に順（したが）う。
張預曰く、方圓斜直は、地に因りて形を成す。

（兵因敵而制勝。）
李筌曰く、敵の勢に因らずんば、吾は何以てか制すや？夫れ、輕兵は持久すること能わず。これを守れば必ず敗れる。重兵はこれに挑みて必ず出でる。怒兵ならばこれを辱め、彊兵ならばこれを緩め、將が驕なればこれに卑（へりくだ）るべし（おだてよ）、將が貪なればこれを利すべし（利で釣れ）、將が疑なればこれに反間すべし（間者を放ち偽情報を流せ）。故に、敵に因りて勝を制す。
杜牧曰く、敵の虛に因れ。
賈林曰く、敵の盛衰の形を見れば、我は得て因りて勝を立つ。
杜佑曰く、言うは、水は地の傾側に因りて其の流を制す、兵は敵の虧闕（不完満）に因りて其の勝を取るものなり。
梅堯臣曰く、虛實に隨（したが）う。
王晳曰く、これを隄防疏導すを謂う（堤防を造って水をため、用水路を造って水を導く）。
何氏曰く、敵の彊弱に因りて功を成す。
張預曰く、虛實彊弱、敵の隨（まま）に勝を取る。

（故兵無常勢，）
梅堯臣曰く、敵に應じて勢を為す。
張預曰く、敵に變動有り、故に、常勢無し。

（水無常形；）
梅堯臣曰く、地に因りて形を為す。
孟氏曰く、兵に變化有り、地に方圓有り。
張預曰く、地に高下有り、故に常形無し。

（能因敵變化而取勝者，謂之神。）
曹操曰く、勢盛（さかん）なるは必ず衰（おとろ）う、形の露（あらわ）なるは必ず敗れる。故に能く敵の變化に因りて勝を取るは神の若し。
李筌曰く、能く此道を知るを、神兵と謂う。
杜牧曰く、兵の勢は、敵に因りて乃ち見（あらわ）る。勢は我に在らず、故に常の勢無し。水の形の如く、地に因りて乃ち有り。形は水に在らず、故に常の形無し。水は地の下に因れば、則ち石を漂わす可し。兵は敵に因りて應ぜば、則ち變化す可きこと神の如きものなり。
梅堯臣曰く、隨いて變化せば、微（いささか）も測る可からず。
王晳曰：兵に常理有るも常勢無し。水に常性有るも常形無し。兵に有る常理とは、虛を擊、是なり。常勢無きとは、敵に因りこれに應ずを以てす。水に有る常性とは、下に就く、是なり。常形無しとは、地に因りこれを制すを以てす。夫れ兵勢に變有れば、則ち敗卒と雖も、尚復（また）勝兵を擊たしむ可し。況や精銳をや？
何氏曰く、權を行い變に應ずは智略在り。智略測る可からず、則ち神妙なる者なり。
張預曰く、兵勢已に定り、能く敵に因りて變動し、應じてこれに勝つ。其の妙は神の如し。

（故五行無常勝，）
杜佑曰く、五行は王を更む（次々に変える；木克土、土克水。水克火、火克金、金克木、五行の徳を歴代の王朝にあてはめて変遷の順を説明する）。
王晳曰：迭（てつ；代わる代わる）して相克つ。

（四時無常位，）
杜佑曰く、四時（春夏秋冬）は迭用す。
王晳曰く、迭して相代る。

（日有短長，月有死生。）
曹操曰く、兵に常勢無し。盈縮（えいしゅく；増減/進退）は敵に隨う。
李筌曰く、五行は「休、囚、王、相」遞（てい；次第に）相勝つ（エネルギー順位；死→囚(幼)→相（青少）→王（壮）→休（老）→死）。四時は寒暑往來し常定無し。日月は周天三百六十五度四分度之一（365日と1/4日で天を一巡す）。百刻は春秋に二分して則ち日夜は均し。夏至の日には、晝は六十刻、夜は四十刻、冬至の日には、晝は四十刻、夜は六十刻となり、長短は均しからず。月の初めは朔とし、八日にして上弦と為し、十五日にして望と為し、二十四日にして下弦と為し、三十日にして晦と為すは、則ち死生の義なり。孫子は五行、四時、日月の盈縮の無常を以為（おも）う、況や兵の形變に於て、安んぞ常定なるや？
梅堯臣曰く、皆（すべ）て、兵を象（かたど）ること敵に隨う所以なり。
王晳曰く、皆て、兵の變化一道に非ざるを喻う。
張預曰く、言五行の休王（衰盛）、四時の代謝，日月の盈昃（満ち欠け）、皆て、兵勢の定無きが如し。

了　2018.09.17　修正　2021.08.01